

遊仙窟の受容

中西進

一 序

僅か八千五百字にも満たぬ遊仙窟が、これ程までに日本文学に影を落そうとは、張文成自身も予期しなかつたに違いない。その長く広い投影の最初に現われるのが、万葉集である。契沖以来諸学者によつて指摘されたものは、ほぼ三十項にも登り、為にこの短篇はずたずたに引き裂かれたかの如き観すらある。

しかし、それでは日本人は遊仙窟を骨の髄まで貪り尽くしたのか。いや、遊仙窟の何を貪つたのか。さらには、果して遊仙窟を貪つたのか。おびただしい量に登る遊仙窟の研究は、⁽¹⁾残念ながら、そうした素朴な質問には何も答えてくれぬようである。

二 万葉集における遊仙窟

万葉集への遊仙窟の投影を指摘した先説には、性急な結びつけも少なくないが、今これらを整理してみると、投影はおよそ四つの面に考

えられる。第一は最も平凡に万葉集漢文に遊仙窟の漢語を使用するという場合で、たとえば当時の俗語と思われる「好去」が憶良の「好去好来歌」(589四題)に用いられる如きもので、「故来」「幸垂」が「故来祀候願垂……」(16三八六九左)に(小島憲之博士説)、「万廻(回)」が池主の題詞(17四〇〇八)に、「費精神」が家持の左注(17四〇一五)に見える(同)。「所恨別易会難去留乖隔」は「嗟此別易彼会難」(5八七一序)とあり(代匠記)。「涕血流襟」は「血泣漣襟」(16三七八六序)に近い。これらは漢文という外国語を記すに当って範と仰いだものでもあり、したがって漢文で書かれたものには万葉以上に濃厚に見られる。逸文丹後風土記に宮殿を摸して「闕台瞻映楼堂玲瓏」というのは「金台銀闕蔽日于雲……雲母飾窗玲瓏映日」に、響応の様を述べて「仙歌寥亮神舞逶迤」というのは五嫂について「太能作舞……遂即逶迤而起」、十娘について「玉躡逶迤人間少足」というのに近い。つまりそれが漢文という外国語の表現だという認定によって書かれたのである、だから同様の表現は以上すべてに亘つて遊仙窟のみが所有するも

のではない。これに対して憶良が「九泉下人一銭不直」（沈痾自哀文）と記すのは少し異なる。遊仙窟にあつては張生と十娘との間に絡ませて筋を複雑にさせている五嫂に、十娘が「五嫂如許大人專擬和合此事」といったのに対し、五嫂が「児是九泉下人」、だから「明日在外処」、「談道児」は「一銭不直」というのである。元来別のものを憶良はつなぎ合わせたのであり、それを「遊仙窟に曰く」とわざわざ断つて引き、かつ「故知生之極貴命之至重」という根拠としている。むしろ遊仙窟と無関係な言辭の応用であつて、これが唯一確実な遊仙窟語の漢文への応用なのである。

この外国語ではない、つまり和歌の表現の中にも遊仙窟の表現が入っている。これが第二の投影である。遊仙窟の「夢見十娘驚覺攪之忽然空手」は「夢裡相見覺寤探抱曾無触手」（16三八五七左）という漢文にも登場するが、家持の坂上大夫への贈歌第一首に「驚きてかき探れども手にも触れねば」（4七四一）と表現される（代匠記）。先にあげた「好去」が同歌の中に「つつみなく幸くいまして」と翻訳されるのと等しい。「運」に「恋」をかける（漆山又四郎氏）のは漢籍に多いが、遊仙窟の「運子実深」と「係恋実深」（16三八五七左）（佐竹昭広氏）、「献新田部親王歌」（16三八三五）の歌と左注の「運」等にある（伊藤博氏）事をもって、ここに言う第一の面から第二の面の導かれるルートが知られる。先掲家持歌も万葉集ではない石上乙磨の風藻詩に「寝裏歎如実驚前恨泣空」という例をもつ。

この和歌表現への投影は、量的に最も多い。右の家持の贈歌は次いで「日日夜寛朝朝帯緩」を「一重のみ妹が結ばん帯をすら三重結ぶべ

く我が身はなりぬ」（4七四二）と（代匠記）、「今宵莫戸夢裏向渠辺」を「夕さらば宿開けまけて我待たむ夢にあひ見に来むといふ人を」（4七四四）と（同）、「未曾飲炭腹熱如焼」を「度まねくなれば我が胸截ち焼く如し」（4七五五）と（同）、承ける。「但令翹羽為人生会些高飛共君去」は安貴王「み空ゆく雲にもがも 高飛ぶ鳥にもがも 明日ゆきて妹に言問ひ」（4五三四）となる（同）。「生前有日但為樂死後無春更看人」が「恋ひ死なむ後は何せむ生ける日の為こそ妹を見まく欲りすれ」（4五六〇）という百代歌と近い（同）。「元来不見他自尋常無事相逢卻交煩惱」は稻公「相見ずは恋ひざらましを妹を見てとなくのみ恋ひば如何にせむ」（4五八六）、「取相思枕留与十娘以為記念」は湯原王「我が衣形見に奉るしきたへの枕をさげずまきてさ寝ませ」（4六三六）と同想である（小島博士）。「落花時泛酒」という趣向は梅花宴の「梅の花誰か泛べし盃の上に」（5八四〇）、「風流たる花と我思ふ酒に泛べこそ」（5八五二）「我を散らすな酒に泛べこそ」（同異伝）となる。また俗信的内容を受取るものとして「昨夜眼皮朧今朝見好人」が「暇なく人の眉根を徒らに搔かしめにつつ会はぬ妹かも」（4五六二）という百代の歌となる（代匠記）。

そしてこれらの表現は必ずしも右の作家達に限って一回的に現われるものではない。第一の場合他に「夢に見て起きて探るに無きがさぶしき」（12二九一四）、第二のそれは「一重結ぶ帯を三重結ひ」（9一八〇）（福麿集）「恋すれば我が帯緩ぶ朝夕ごとく」（13三三六二）「恋をしすれば常の帯を三重結ぶべく我が身はなりぬ」（13三三七三）、第三のそれは「夢に我れ今宵至らむ宿閉すなゆめ」（12二九一二）、第四のそ

れは「物を思へば我が胸は破れて摧けて利心もなし」(12二八九四)「胸を熱み朝戸開くれば」(13三〇三四)、最後のそれは「眉根掻き鼻ひ紐解け待てりやも何時かも見むと恋ひ来し我を」(11二八〇八)「鼻ひ鼻ひし肩かゆみ思ひし事は君にしありけり」(11二八〇九)「いとのかきて薄き眉ねを徒らに掻かしめにつつ会はぬ人かも」(12二九〇三)の如くに見られ、また漢籍にあつても、「忽寝寐而夢想兮魂若君之在傍惕寐覚而無見兮」(文選 長門賦)「夢在我傍忽覚在他郷」(同、樂府「飲馬長城窟行」)「相去日已遠衣帶日已緩」(同、古詩)「寬帶為思君」(玉台新詠、卷下、蕭繹「詠陌復」)の如く見られるものでもある。

さて次に第三の面として、いわば詩の性格への投影が見られる。遊仙窟の中に「機警」と呼ばれて藁に早、梨に離、杏に幸、忍標に忍耐をかけた問答が出て来るが、先の蓮_二恋の如く、藁に掃の同音の意識(16三八三〇、小島博士)、成齋に梨_二藁という遊仙窟の技巧(16三八三四、土橋寛博士)があると説かれる。またこの問答をはじめとする詩の唱和が属目による詠物であり、それが和歌の詠物歌に作用していると思われる。また万葉集中の幾度かの恋歌の贈答が遊仙窟のそれを摸するものだとする説があり、湯原王と娘子とのそれ(4六三一―六四一、太田青丘博士)、家持と坂上大嬢とのそれ(4七二七―七五五、小島博士)が考えられている。

そして最後の面として、作品の構想上に立働いた面がある。旅人作と思われる「遊松浦河」(5八五三―八六三)は字句の借用から遊仙窟の影響が確実に指摘出来るが、松浦河に娘子に会い、神仙の子かと疑って歌を贈答するという趣向は正しく仙窟と一致する。かつこれを机上

の作と考える説もあり、「帥老」とわざわざ記して追和歌を添える点、ますます架空性が濃い。また竹取翁歌と通称される長歌(16三七九―一三八〇二)も字句に類同があり、老翁が「逢神仙」という構想と歌の贈答が遊仙窟の傾向を帯びる。前者は代匠記、後者は小野機太郎氏の指摘である。

万葉集における遊仙窟の投影として、管見に入り、妥当と思われるもの、また些かの私見によるものは、以上ですべてである。後述の意図をもって煩を厭わず、また多く事実のみを掲げた。これをもってすれば、遊仙窟の万葉集への流入は滔々たるものであり、万葉集の遊仙窟受容はまことに大きかったかの如くである。

三 遊仙窟の世界

一体、遊仙窟とはいかなる作品であるのか。その性格は色々な指摘が可能であるが、その最も大きなものの一つとして考えられるものに、現実性といったものがある。現実性という言葉は曖昧だが、特定の階層の支持を受けるような高踏的性格を、いささかも具備しない大衆性、口訥的に生きて語りかける生活性、古典的静さから遠く距った今日性、といった性格をもつ。遊仙窟はこの短篇の中に八十余首の詩をもち、その贈答の中に事態が進行する。この歌の挿入が変文の影響を受けたものだという中国学者の説に従うならば、まずこの形態の選択において大衆性を獲得しているというべきであるが、さらに詩の唱和の態をとらぬ地の文にも、

望神仙兮不可見 普天地兮余心

思神仙兮不可得 覓十娘兮斷知聞
欲聞此兮腸亦乱 更見此兮惱余心

の如きを弄し、かつこれは「空抱膝而長吟」として全篇をとじる最後である。この韻律的配慮はきわめて口誦ののぼり易かつたであろう。有効な意図である。また断えず指摘されている機警も等しい。機警が同音異義のし、やれにあるとすれば、その力が活き活きと發揮されるのは音誦においてである。文字において裏を早に置き換えて味わり時には、既に本当の機警の意味は失われているというべきである。恐らくは遊仙窟の成立への環境的要請として音誦される条件があつたのだろう。文成の意図はここに発し、見事に成功する事によって大衆性・生活性を獲得しているのである。この機警を含めた属目詠物の即興詩が到る処に存在するが、右に続く部分において十娘が「暫借少府刀子割梨」といい、対して張生は刀子を詠ずる。ついで十娘は鞘を詠ずる。意は淫靡ではあるが、いささかも露骨にせぬのが喝采を拍する所以なのだが、同時にその段階に描写がとどまる限りにおいてはかなり思考を要する。それを、続いて作者は五嫂に「向來漸漸入深也」と言わせている。この解説を付する事によって、張生と十娘との唱和の、いわばコント風な風味は失われて、全く卑俗なものになってしまう。そしてその代りに、より多くの読者の読物たるの資格を具える事になる。遊仙窟はかかる五嫂なる人物を登場させ、かかる会話を挿入する任務を負わせているのである。

この淫意を寓した詩の唱和もその一つであるが、これら言葉のあやを弄する会話は、たとえば張生の「恰是神仙此是神仙窟也」を承けて

十娘が「更勝文章此是文章窟也」と言う面にも見られ、さらに複雑な機知を弄した会話となる。双六をするに当って、酒を賭けようという十娘に対して張生は「共娘子賭宿」けようという。そして「娘子輪籌則共下官臥一宿、下官輪籌則娘子臥一宿」という。読者はこのたわいない論理の機知に笑いこけるに違いない。文成の狙いはそこにある。しかしかつ作者は丁寧である。この後に十娘の会話として「漢騎驢則胡步行、胡步行則漢騎驢」という故事を言わせて、一種のなぞときをして、先の部分を読解し得たものは、これによって自らの読解を確認し、一層安らかに笑って次へ読み進むだろうし、先を読解し得なかつたものは、これによって事を完全に知って笑うだろう。遊仙窟はすべての人間に読まれ味わわれ得るのである。

いう迄もなく遊仙窟は性の描写に最も大きく依存して読者を得ようとしている。この事自体の通俗性の上に、右にあげた口誦的要素や構成における大衆性が加えられて、遊仙窟の現実性といったものが出来上っているのだが、しかしこの書は全くの低読者層を相手としたものではない。この全篇におびただしく援かれる故事の応用は、相当な知識を有するものでなければ判じ難いものがある。読者はその故事を想起し続ける事によって無意識な自足を得たであろう。文成はかかる読者の、やや高慢な自意識も裏切らなかつたのである。そして、もっと正当な小説への要求としての心理描写においても、文成の筆は冴えている。張生と十娘・五嫂のいる処に琴心という婢が入って来る。美女である。張生が偷み見をする。十娘の曇った表情を見て取った五嫂は十娘が眉をひそめているではないかとなじる。ところが十娘は心を曇

らせながら五嫂にそう言われた事自体が気に入らない。「少府閑児何事」と声を荒げる。「だってお嬢さまは頻りに張さんの方ばかりを見ていらっしやるではありませんか」と言う五嫂はまだ忠実な下女である。「お前は自分で気があるからそんな風に見るのね。私は見とれてなんかいません」、気位の高い主人の言葉を五嫂はからかう。「娘子不能新婦自取」。十娘は答える。「張さんにうかがってごらん。わたし知らなくてよ」。女に知らないわと言わせたらしめたものだ、と書いたのは、「下モ又の死」の有島武郎であったが、このまま近代小説の中に移しても生色を失わないだろう心理の展開と会話の妙とを感じるのには、私だけであろうか。まさに遊仙窟は、志怪ではない、最古の「小説」なのである。単なる通俗性という範囲を越えて、正当な小説への要求をもつ読者層をも摂し得る現実性を、遊仙窟は性格としている。

それでいて遊仙窟は、全く現実的な小説かという点と、違ふ。遊仙という構想は六朝の遊仙詩から流れついたものである。殊に六朝末期の郭璞らの遊仙詩に見られる仙境や陶潜の桃花源記は必ずや文成の顧みるところであつたらう。郭璞詩には赤松子や鬼谷子が現われ、美しい自然の中に雲に乗る神仙が登場する。遊仙窟においても「古老相伝云此是神仙窟也」で、「一心潔齋三日縁細葛沂輕舟」って到る境であり、時に「身躰若飛精靈似夢」る状態にある。この舞台は仙境なのである。遊仙窟の文章は四六の舞文によつて華麗をきわめる。中堂に入れば壮麗な建物の描写が続き、酒食が勧められればあらゆる言辞がこれに費され、舞を叙べ、園を描き、寢室を摸して、華麗な四六駢麗の文が長々とくりひろげられる。その中に、詩のリフレインのように繰返

されるのは十娘の花容である。たとえばその最初の形容は次の如くである。

十娘天上無雙 人間有一 依依弱柳 束作腰支 饒饒橫波 翻成
眼尾 纒舒兩頰 熟疑地上無華 乍出雙眉 漸覺天辺失月 能使
西施掩面百遍燒粧 使南国傷心千迴撲鏡 洛川迴雪 只堪使疊衣
裳 巫山仙雲 未敢為擎鞞履 忽秋胡之眼拙 枉費黃金 念交甫
之心狂 虛當白玉

辭賦に見られるような、この形容の仕方は、大仰で陳腐だといえはその通りだが、こうした舞文が折重なる波のように次々と繰返されると、この舞台は超現実の仙境なのだという認定が何時か読者に生じて来る。冷やかな批評家ではない読者は、何時か仙境にいる如き錯誤に陥っている。この華やかな幻想性こそ、六朝文学の流れを汲む事によって得た遊仙窟の、第二の大きな性格である。

私はかくて遊仙窟という小説を現実性と幻想性との中に規定したいと思う。この両者は、一見きわめて矛盾するであろう。しかし矛盾してはいない。遊仙窟は六朝遊仙詩を継承して華やかな自然描写を持ちながら、郭璞らに見られるような隠逸の思想を欠いているのである。仙境自体厳然たる幻想であり、華美な生活も飽満な酒食も、また才覚ある美女との一宿も、すべては非現実的な幻想でありながら、あくまでも現実の事態・行為として描かれるのであり、郭璞らが世俗を外にして求めた隠逸の世界ではない。それどころか、むしろこれら道家詩人が否定して背を向けていった当のものが、道家詩人の立ち向った仙境の中にあるのである。いってみれば郭璞らの遊仙詩においては仙境は

存し得るものとして確信されていた。仙境は現実であった。対して遊仙窟における神仙なるものは、現実として信じられてはいない。現実的な幻想をすればする程現実から遠のく。ここに郭璞らとの相違がある。六朝遊仙詩は幻想的現実であり、遊仙窟は現実的幻想であった。

張文成はその世界が現実には存在しない事を百も承知しながら、きわめて現実的な事として世界を構築するのである。遊仙窟が武后に奉られたという唐物語の話は、あり得べき伝説として以上に真实性を持たぬであろうが、武后を含めて当時の宮廷人士、さらには新羅、日本の使者まで、遊仙窟の読者は、現実的であればある程、この幻想の中に自己を鑄覚したであろう。張文成を嫌った姚崇の氣持が、わからぬでもない文成の浮才は、巧みにこの読者の心理を把えたと、いってよい。

遊仙窟の成立は定かな時期を知り難いが、則天武后朝およびその直後は大唐帝国の版図の最も拡大した時期であり、その首都長安の喧騒と濁濁、壯麗と浮華は盧照鄰の慨嘆をもつてしても想像にたやすい。遊仙窟の遊蕩的性格はその中に生まれたものであろうし、神仙思想の伝統に依りながら、この宮廷の基層に剝削を享樂していた官人たちの夢を代弁してみせたところに、沸騰的な人氣の秘密があったのである。

四 結

さて、右の如く遊仙窟を現実的幻想と規定し、基層官人の夢の代弁であったと考えるならば、万葉集はこれをそのまま受容しているであ

らうか。この遊仙窟の作品性が万葉集の中にどっかと根を下ろした時に、我々は遊仙窟の影響は大きかったと、言えるはずである。果してそうか。

既に見た如く、第一の漢文語句の借用という面については、断片的な諸語を遊仙窟語と断じ得ず、唯一「遊仙窟に曰く」として引用した憶良の場合も、甚だしく内容を変えたものであった。この面について影響は皆無といつてよい。いう迄もなく、借用は影響ではない。

第三の（順序が乱れるが）詩の性格という面についても、機警なるもの自体は歌經標式にも取上げられているように、遊仙窟のそれを応用したに過ぎないものであり、属目器物の詠物詩も、遊仙窟のそれ自身が李嶠詠物詩らに倣ったものとされていて、遊仙窟の影響によって我が詠物歌が出来たのではない。湯原王や家持の詩の贈答がもし遊仙窟に拠るものだとすれば、彼らは仮空の恋の主人公に自らを仕立て、架空の娘子と贈答したのだという前提が必要である。そしてそれを遊仙窟によって作したのだとすれば、平凡な贈答よりも、一層遊仙窟によりかかった構想や語句を用いていなければならぬ。かつ湯原王の方は娘子として女性を仕立てているが、家持の方は実在の坂上大嬢である。その名を仮空の恋の主人公に冠する事はあり得ない。これらはやはり集中に幾らも例のある、数首の恋の贈答が丹念に蒐集されたに過ぎないのである。

これらに比して第二の和歌表現への投影という面は、より遊仙窟に近い。上掲の如くこれらは作者未詳歌に類例をもつものであって、その点から迫徹郎氏によって遊仙窟模倣説の再吟味が要求されているも

のである。⁽³⁾ かつて私は卷十一・十二ら作者未詳歌巻が遊仙窟語をもつようになりに新しい事を述べたが、⁽⁴⁾ この作者未詳歌の存在によって遊仙窟が巾広く官人衆庶に享受された事を認めねばならぬ。唐土文学の享受が時代の趨勢であった事は無論だが、その上にも述べた如き官人衆庶の夢の代弁者であった事が重大であろう。この受取られ方は正しいのであり、その面において遊仙窟は受容されたと、言わねばならぬ。それが和歌の表現に応用される程である事は、巾広く根深いものである事を想像させるが、しかし家持にしる、失名の衆庶にしる、彼らはこれを恋の表現に借り用いたのである。その限りにおいては、先に認めた如き遊仙窟の本質はいささかも受容されてはいない。先にも、この面に用いられた表現が遊仙窟の他に文選の賦や樂府、古詩、また玉台新詠にある事を掲げた。これらを排して遊仙窟の受容を云うのであれば、唯一右の如き遊仙窟の本質が受容されていなければならぬのである。和歌は生活的な詩歌であり、私的な詠懐がその本質である。この、いわば非文芸的性格といったものは、遊仙窟の介入を許容しない。遊仙窟は官人衆庶の感覚に投合して、絶大な享受をうけた。しかし和歌の世界には恋の断片的な表現に花片を投げかける以上に、介入し得なかつたのである。

最後の構想という面については、遊仙窟の投影は大きい。竹取翁歌は漢文の序がそれに近く、長歌は複雑な成長を示している⁽⁵⁾ので、当面の問題としては松浦河の歌に限ってよい。旅人がこの作を机上でなしたとすれば単に語句の類似のみならず一場の世界そのものが、遊仙窟のそれである。歌には仄かにしか現われないが、「豈可非借老哉」

という段階まで構想したり、下官の「唯唯」という語調に現われる心理の把握があつたり、ここに見られる遊仙窟の扱え方は全く正しい。遊仙窟を持ち帰つたのは憶良であろうという感想が通行しているが、そう言われる憶良が全く非遊仙窟的であるのに対して、この旅人の遊仙窟理解は驚くべきものがある。常にさり気ない旅人の見せる漢文学の素養は、並々ならぬものがあつたのであろう。ここにおいて遊仙窟は受容されたと、いつてよい。同じ散文でも丹後風土記の浦島伝説が描写にのみ遊仙窟を用いているのだから、旅人が単に散文を作つた故にのみ、遊仙窟の受容が可能だったとはいえない。

しかし、再思して作に接するに、かの遊仙窟の現実的幻想は、きらびやかな幻想の中に自己を錯誤せしめるものであつた。その故に現実的であり幻想的であつた。対して旅人は異なる。旅人の、この作をなす精神は現実機構からの逸脱を求める精神である。そこにこそ机上の作たる事が意味をもつ。一つの「風流」だったのである。現実からの逸脱という点においては、六朝詩にすら近い。文成より旅人は冷えていく。静かな幻想である。興じてみたという、その事が旅人のすべてであつた。

神思想の伝統により、武后朝の浮華を反映して成つた遊仙窟の、現実的幻想は唯一唐土を離れては成立し得なかつたはずである。それを輸入したからとて、遊仙窟がその風土を捨てて日本に安住するはずも、またあり得ない。八世紀日本の、官人貴族がそれをもてはやしたのは、だから、官人衆庶の夢の代弁者としての意味をもつたにしろ、あくまでも唐土のイメージの中に、もてはやしたのであつた。異土の

きらびやかな幻想は一層官人群の夢を雄弁に代弁する事となる。旅人が「風流」を求めてみるのも、異土のイメージだからである。唐土の遊蕩文字の言葉なればこそ、恋の表現に用いて興するのである。異土のイメージは遂に日本人の精神構造をかえる事が出来なかつたし、文学の変質を齎らす事もなかつた。八世紀官人の生活におびただしく享受され、万葉集にさまざまな類縁を結びながら、遊仙窟は遂に受容されてはいないのである。(本稿は本年五月二八日、善隣書院創立七十周年記念講演会の講演に加筆したものである。六月五日)

註1 従来の研究はHoward S. Levy "The Dwelling of Playful Goddesses" の The Source が最も完備した集成である。

2 こゝに掲げた諸説の代匠記以外の所在は次の如くである。

小野機太郎氏「上代文学と漢文学」上代日本文学講座第二卷
太田青丘博士「日本歌学と中国詩学」

漆山又四郎氏「遊仙窟」(岩波文庫)

小島憲之博士「上代日本文学と中国文学」中卷

土橋寛博士「遊仙窟と万葉集」万葉三号

佐竹昭広氏「独りのみきぬる衣」万葉一号

伊藤博氏「はちすー戯歌の一解釈——」万葉三八号

3 「万葉集に見える遊仙窟模倣歌についての再吟味」熊本女子大学学術紀要一〇巻一号

4 拙著「万葉集の比較文学的研究」九二七頁
同右八三四頁以下に詳述した。

(成城大学助教授・文学博士)

○会員住所、地番変更

永岡 健右 杉並区下高井戸四ノ九九五 大津方

西 一祥 沼津市真砂町二四八

西 陸子 同右

平山 城児 練馬区東大泉一八五

福島 瑞江 港区南青山一丁目一五番三一号

藤田 寛海 埼玉県鴻巣市本町八丁目

武藤 超人 文京区小石川五丁目二〇 十七号 相馬荘

三井田佳子 渋谷区東一丁目四番十七号

翠川 文子 豊島区目白町四ノ一五ノ一六 脇沢方

○新入会員

新垣 幸得 杉並区和田三丁目四一ノ二九 梅花女子大学文学部日

本文学研究室 大阪府茨木市宿久庄一七一

平間 寿子 台東区浅草吉野町三ノ四